

# 草庵仏教

第227号  
(発行日)

2009年5月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

## 《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○ 聖典共学会 --- 毎月6日。

午後7時より。

\* 8月22日同朋の会および8

月12日念仏座談会は休みます

## 心を救う大悲の心

真宗のお話を聞いてもなかなか分からないとよくいわれます。このことは真宗に限らず、仏教ないしは宗教全体についていわれることだと思えます。なぜ教えを聞いて分からないのか。その主な原因は、現代人の考えがものごとを物質的にとらえる傾向に非常に偏っているからではないでしょうか。

まず、〈私〉という場合、私を物質的に考え、この肉体を私と誤ってしまいます。だから〈私を大事にしよう〉というのは私の肉体を大事にすることと受けとり、食べ物に気をつけるとか、運動不足にならないように毎日一万歩あるとか、体にあまり無理なことをしないとか、そうすることが自分を大事にすることと思うのです。

また〈いのちが尊い〉というのもどう理解しているかというのと、私のいのちは、地球に生命が誕生して以来、数十億年かかってやっと人間のい

のちにまでなかった。それほど長い時間がかかって誕生した人間のいのちだから〈尊い〉のだ、とよく言われます。しかし、その場合のいのちは物質的な生命としての〈いのち〉の歴史のことだと思えます。

そのように私のいのちといふものも物質現象の枠内わくないで考えますから、〈私は生かされている〉ということも、水や太陽の光や食べ物や、親や周りの人たちのお世話などによって、現在生かされている〈私のいのち〉と考えてしまいます。この場合の〈いのち〉も私の肉体のいのちにおいて受けとっております。肉体のいのちが、さまざま条件で支えられて生かされていると理解しているのです。物質的のちとしては実際その通りですが、その場合のいのちは、先ずはこの肉体のいのちにおいて理解されているのです。

係)ですが、それを聞こうとする時、私の肉体を中心において聞くと、聞き誤りを生じたり、分からなくなったりする可能性があります。

たとえば〈阿弥陀仏に生かされている〉というお話を聞いて、阿弥陀仏はこの私(肉体)を生かして下さると聞き、今こうして生きておられるのは阿弥陀仏のお陰、と聞くようになりません。そう理解してしまいます。今は生かされて有難いけれども、やがて死なねばなりません。死ぬ時が来ると、阿弥陀様はもう私を生かして下さらなくなるではないでしょうか。そうすると、死に際には〈神も仏もあるものか〉になって、今までの〈生かして下さる阿弥陀様ありがたい〉の信仰は崩れてしまうのではないのでしょうか。

又、〈阿弥陀仏は私を浄土に生まれさせて下さる〉という法話の意味もよく分からないうことになります。なぜならこの私(肉体)は最後には死

こういう考え方で真宗の法話を聞くとうなるのでしょうか。真宗のお話の中心は阿弥陀仏と私の関

んで焼かれて骨と灰になってしまいますから、そんな私が浄土に生まれるなんて、どうい信じられないということになるのではないのでしょうか。

死んだら、肉体(私)は終わりですから、死後は何もなくなると思えば、死後の救いについては考えず、もっぱら現在生かされているところだけで〈阿弥陀様の救いやお陰様〉を受けとろうとします。

しかしそういう場合、〈仏のお陰様〉を喜べるのは元気で生活している時だけでありましょう。自分が元気でいる状態を阿弥陀様のお陰だとして喜んでるのは〈自分の都合の良い〉のを喜んでいるに過ぎないのではないのでしょうか。

そして、死んで浄土に生まれるという話を聞いても、実際は死後の浄土往生を真剣に受けとっておらず、どう現在を生きたいかという、現在の生活の上だけで真宗の教えを聞こうとしてしまいます。

多くの現代人が阿弥陀仏も浄土も信じない主な理由は、〈阿弥陀仏はどこにも見えな

いではないか）（浄土はどこにも確認できないではないか）と思うからでありましよう。

これも阿弥陀仏や浄土を、物質ないし物質現象の上にとらえようとしているからであります。月や太陽は目に確認でき、分子化合物も電子顕微鏡で確認できます。しかし阿弥陀仏や浄土はどこを探しても確認できない」というのでしようが、仏や浄土を物質や物質現象のように考えているのがそもそもおかしいのであります。私たちの目や耳や手で確認できるのは物質——しかもある程度の大きさをもった——しか確認できません。

私とは肉体なのでしようか、肉体が本質なのでしようか。むしろ心こそ私とよばれている当体ではないでしようか。心こそ私の主体ではないでしようか。

（阿弥陀仏も浄土も見えないではないか）と疑っている（汝）そのもの、それは肉体でしようか。疑い考えているのは心ではありませんか。その心である（私）そのものは見えません。私は私の心（自

分自身）を見たことはありませんし、他の人々の心も見たことはありません。

自分自身さえ見えないものが、仏や浄土が見えないからといって（仏や浄土は無いものだ）と決めつけるなら、そう言っている（私）そのものも無いことになりましよう。

仏や浄土は外の物質現象の中に探しても見つかるはずがありません。阿弥陀仏や浄土は心において、私たちに感知されてくるのでしよう。

阿弥陀仏の救済とは、阿弥陀仏の大きいなる慈悲心に私の心が摂め取られるのであります。また、浄土に生まれるということとは、私たちの心が浄化されて仏心に転成するとき浄土が顕現する、といえるのではないでしようか。

私たちは肉体だけの存在ではありません。心は存在でもあります。しかも心の方が主であります。私は肉体としての物質と、心という非物質とが不思議にも相即して存在している実に不可思議な存在であり、しかも心こそ主体であると思えます。（了）

# 正信偈に学ぶ問答

## （十五）

普放無量無辺光

無碍無对光炎王

清浄歓喜智慧光

不断難思無称光

超日月光照塵刹

一切群生蒙光照

（書き下し文）

普く、無量・無辺光、無碍・無对・光炎王、清浄・歓喜・智慧光、不断・難思・無称光、超日月光を放って、塵刹を照らす。一切の群生、光照を蒙る。

\*

G 「無对とは無对光のこと、とお聞きしてますが、無对光とはどういう意味でしようか」

D 「阿弥陀如来の御光が、他に比べて比較にならないほど勝れたもうことを讃えられた言葉です」

G 「何に対比して勝れてますのですか」

D 「他の諸仏や諸の菩薩や諸神の光明の徳に比べて、阿弥陀仏の徳の勝れていることを

讃えておられるのです」

G 「無对光の徳はどういう風に勝れているのでしようか」

D 「それについて、親鸞聖人は無对光を讃えて、ご和讃に

清浄光明ならびなし

遇斯光のゆへなれば

一切の業繋ものぞこりぬ

畢竟依を帰命せよ

と申されています。このご和讃は、清浄光明の阿弥陀仏の本願を信ずる者は、一切の業繋を除かれていく、だから畢竟のよりどころとなりたもう阿弥陀仏に帰せよとの思し召しでありましよう。阿弥陀仏は他の諸仏菩薩に比して、比べることができないほどの広大な徳がまします、といわれ、その理由とし、一切の業繋を除かれるからだ、と仰せになっていきます」

G 「業繋とはどういう意味ですか」

D 「繋とはつなぐ、しばる、束縛する、悩ます、という意味でしよう。ですから、業に

つながれ、業に束縛されるのが業繋でありましよう」

G 「ここでいわれる業繋の業とはどういう意味でしようか」

D 「宿業という意味での業のことでもあり、業煩惱といわれる場合の業ともいえましよう」

G 「宿業とは過去の業ということですが、それが現在の私を縛るのですね」

D 「ええ、そうですね。今までの過去の自分の生き様の結果として現在の私があるのだと、教えによつて感知されてまいります。特にこの世に生まれる前の私の行い（業）の結果が現在の私の生き様の根になっていると教えられ、感じられてきます。この世に生まれた時点で、すでに背負ってきている私の性質は過去の業の表れとも言えましよう」

G 「過去の宿業がなぜ今の私の束縛になるのですか」

D 「私たちはこのままの私に満足しておらず自分をよりましな自分に変えたいという願望をもっています。どうか願りたい、もっと自由で、もっと善い、もっと素晴らしい人間になりたいと願っています





# 信心夜話

ゴシック文字の部分は松並さんの言

葉

○伊勢の広永へお詣りの時、母屋からはなれ座敷へ行く途中（中庭が随分広い）夜分の事とて、あたりに誰も居ないのに、突然声あり、確かに聞えたり。「口に現れ給うお念仏、それぞれ其の南無阿弥陀仏に、助けられて往生ぞや」と。南無阿弥陀仏 声が空に聞えたり

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

（松並さんは、こんな風に突然に仏の仰せが響くことが何度もあったとのこと）  
と言われた。へそれぞれの南無阿弥陀仏に助けられて往生ぞや」とのお声。空中のお声。凡夫の妄念妄想の心に外から声がかかる。内は妄念妄想であるが、外は広大な真実の領域であろう。そこからお声がかかって、広大な真実の領域を感知せしめられる。松並さんの場合は、これが実にリアルである。私のように、ほのかに感じられるというのではない。それは一見、幻聴に似ているが、幻聴とは対極にあるものである。真実そのものが音声（言葉）となって喚びかけたもう。

口に現れたもう南無阿弥陀仏、この

の阿弥陀様である。私一人のため、私を助けたもう、私の阿弥陀様である。

仏心が凡心に來たつて、主となりたもう。仏心が凡心を受容して下さつ

ているのである。そして浄土に生まれることが約束されているのである。私の主となりたもう仏心が南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と、ご自身を現したもう。この南無阿弥陀仏に助けられての往生である）

○伊勢治田の出口様への手紙

我が機は悪しきいたずら者と、少しは照らしい出されたたとて、如来様が見抜いて下されたほどにも、悪いとも知らねば、お念仏様が尊いと、少しは身に知らされたたとて、諸仏菩薩方が讃嘆あそばすほどにも尊いとも知らず、ただただ、こんな私の為にとて、南無阿弥陀仏に成りまして、南無阿弥陀仏と呼びかけて、南無阿弥陀仏と、こんな口から、現れて下さる。その御念

力、不思議なお力を仰ぐほか、そのすべさえ知りません。と申しましたも感謝もなければ、懺悔もなく、ただただ南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏と口の動くばかりで、まことにお恥ずかしゆう存じます。私の様な片輪者は、とてもの事に有難い信者には、なり得ませんで、南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 人の様に喜び得ませんで南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏と口にまかせて、仰せのもとに南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏と、聞かされています。

見る影もない、西も東も弁えぬ、すねて、あまえて、無理言うて南無阿弥陀仏と、唯なっています。いいいいい、そのなく事すらなきかねますので、なかされていきます。このおろか者が、その内お宅までなかされに詣ります。母上様によろしくお伝え下さいませ。

「かならずかしこい人のまねはなさらぬ様願上げます」

松並松五郎 南無阿弥陀仏

出口様

（これなども実に有難く、尊いお手紙で、後世に残すべきほどの内容である。解釈や講釈をばさんではかえって濃い水が薄まることをおそれる。ただ近年、機の自覚ということが強調されて、我執の深い者でありました、と頭が下がりました）  
などという話をよく聞か、どれほど自分の罪や悪が仏法に照らされて知れたとて、私に知れた悪はわずかである。そんなものは当てにも手柄にも、お助けの益にもたためぬ。如来様が（極重の悪人）と仰せ下さる程の悪はどうてい私には知れぬ。またどれほど如来様のご恩の尊さが知れても、凡夫の知りようはどこまでも浅い。自分の悪を少しは自覚しても、それが助かる種にもならず、如来様のご恩の

程が少しは尊いと感じられても、それが往生の助けにもならない。私の往生はどこまでも全く（仏仕事）であつて、私の自覚や感激に依るのではない。南無阿弥陀仏の不思議な不思議なお力に助けられるばかりである。その力を仰ぐ外にはない。感謝も乏しく慚愧も

その場かぎりの、まったくのゼロの私。ゼロの私に南無阿弥陀仏と口割って現れまします御念力。この大悲のご念力に甘えるばかり。極重悪人を仏にするという無理を引き受けたもう大悲の阿弥陀様に甘えて、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と口先ばかりで称える一つ、聞く一つ、鳴く一つ。鳴くは泣くでもあ

る。鳥が口先で鳴くようなもの。その鳴くことも如来様に鳴かされている。深い深い大悲のお心を、極めて浅いお念仏の声に聞き受けるのには凡夫の知恵はいらぬ。かえつて邪魔である。詮索するのはかしこい人にまかせて、こんな愚かな者への不思議な大悲の仰せを手ぶらで仰ぐのみ）

(一丁)



梵天 I (1)  
(C)SHOGAKUKAN INC.